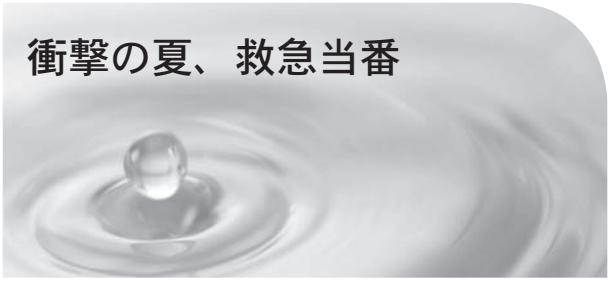
衝撃の夏、救急当番



夕張市医師会
南清水沢診療所
立　花　康　人

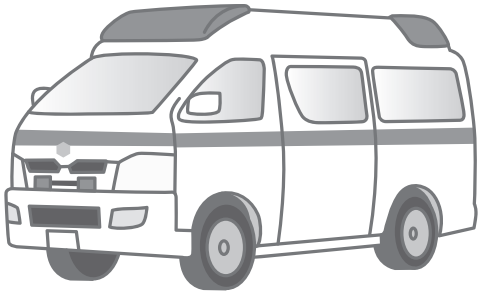
毎年今の時期になると、ある患者さんのことを思い出す。

今からちょうど６年前、夏の蒸し暑い昼過ぎの出来事であった。

その日は休日当番で朝から仕事をしていた。昼過ぎに救急隊より連絡があり、60歳台の男性Ａさんが昼食中に胸痛を訴えているとのことで、救急車にて当院へ受診となった。

受診時には症状がある程度治まっていたものの、心電図検査では急性心筋梗塞が考えられ、すぐに専門病院へ送らなければならない状態であった。直ちにルートを確保し、酸素投与を行い、専門病院へ連絡を取っていたが、その間に急変したのだ。その場から離れて２～３分も経っていない時であった。救急隊員より「先生！　患者さんが急に痙攣を起こして、脈も触れない状態です」と大声で呼ばれた。モニター上心室細動を認めたため、直ちにＡＥＤによる除細動を行い、幸いにも効果があり心拍が再開した。しかしそれと同時に大声を出し、手足をバタバタとし起き上がろうと暴れだした。体格も大柄だったので、大人７～８人で抑え込まないと処置ができない状況となってしまった（もちろんルートも外れてしまった）。何とか鎮静剤を投与した上で気管挿管を実施し、ルートも再確保した。しかし、その後に何度も心室細動、心停止を起こし、心臓マッサージ、除細動（６～７回）、薬物投与が必要で危険な状態であった。処置をしている間に、今までにないような土砂降りの雨があり、雷も近くで大きな音を立てていた。時間がとても長く感じ、その光景や、緊張感は今でも鮮明に覚えている。この病状では陸路での搬送はできないと当初より判断し、Drヘリの要請をしていた。途中で連絡があり、この空の状態では夕張まで飛ぶことはできず、隣町の由仁町までしか来ることができないとのことであったが、救急隊等関係者の方々の迅速な対応でとても早く来ていただいた。その後の情報提供では、やはり診断は心筋梗塞で、何度も上記のようなことを繰り返し危険な状態であったが、何とか安定したとのこと。ご家族の話では後遺症が残る可能性が大きいとのことであった。

実はこの日、看護大学に通い始めた上の娘が偶然にも立ち会っていた。娘は何も手伝うことができず、途中から怖くて奥の部屋で泣いていたという。当然だと思う。私も必死に処置をしていて、娘を気遣うこともできず申し訳なく思ったが、今後のためにいい経験になったと思う。私が帰るたびに、娘はＡさんのその後の状況をいつも心配していた。

約２ヵ月後、休日当番をしていたときにＡさんがひょっこりと診療所に現れた。「先生本当にありがとうございました。当院に搬送されたところまでは覚えていますが、その後のことは全く覚えておりません。助けられた命を大切にして生きていきます」とお元気な姿に感動し、涙を流してしまった。何の後遺症もなく回復されたのだ。病院、Drヘリ、救急隊、診療所の連携で一人の尊い命を救ったのだと思う。関係いただいたスタッフの皆様に感謝、感謝、感謝。

その後のＡさんは、90歳台の義母が一人で当院へ通院されていたが、最近足腰が弱くなってきたため、数年前から受診介助のため元気に姿を見せてくれている。そのたびに、今後もいつこのような患者さんが発生するかもしれず、普段から迅速に対応できるように準備をしなければならないと思いながら診療をしている。